

水底の歌

みなそこ

うた

柿本人麿論

(上巻)

梅原猛



212280



日文 701676714

水底の歌

みなそこ

うた

柿本人麿論 (上巻)

梅原 猛



水底の歌

柿本人麿論——(上巻)

昭和四十八年十一月十日 発行
昭和五十年六月十五日 九刷

定価一〇〇〇円

著者 梅原 猛

発行者 佐藤 亮一

活版 株式会社 三秀舎

写真版 学術写真製版所

原色版 半七写真印刷工業

製本 新宿加藤製本

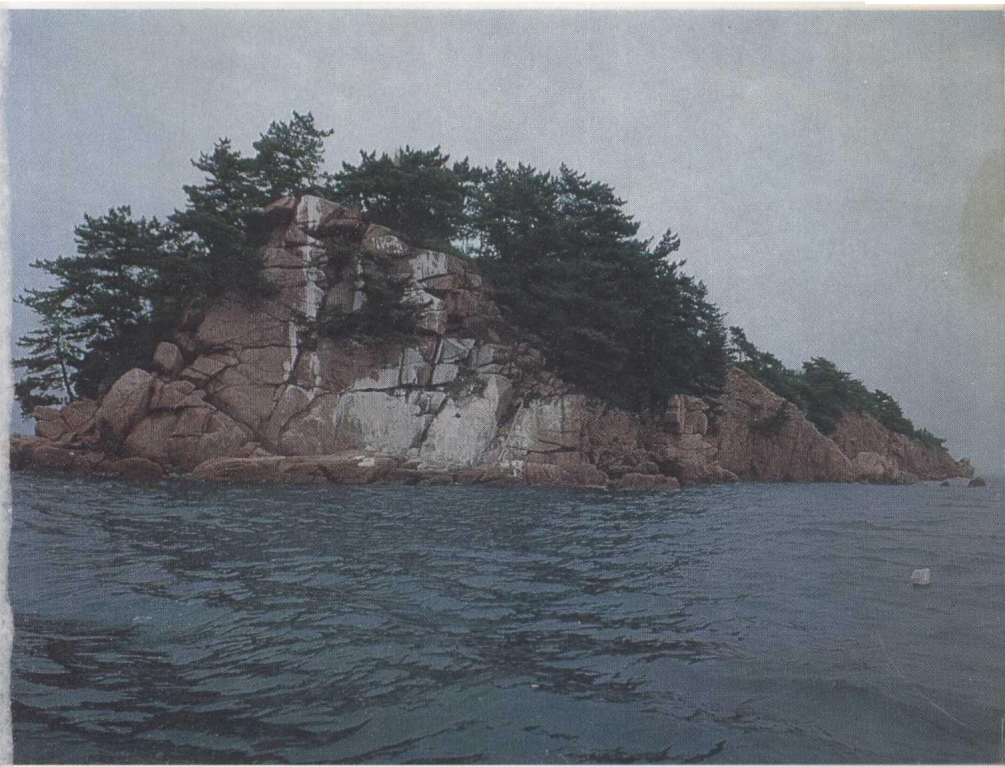
発行所 株式会社 新潮社

162 東京都新宿区矢来町七一
電話業務部 二六六五五一一
編集部 二六六五四一一
振替東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えます。



1 柿本人麿像（奈良県新庄町柿本村所蔵）



2 沙弥島（坂出市）

水底の歌（上巻）・目次

第一部 柿本人麿の死——斎藤茂吉説をめぐって——

九

第一章 斎藤茂吉の鴨山考

二

歌聖・柿本人麿の秘密 終焉の地をめぐる謎 斎藤茂吉による鴨山・石川

の推定 茂吉の詩的直観と沢瀉・土屋・武田三氏の反応 茂吉の鴨山発見

——三つの前提条件 茂吉の推論——鴨山搜索の三つの鍵 カメはカモよ

り転じ、貝は蛭を表わす 浜原への道——人麿のルートの推定 砂鉄の地

の伝染病——人麿の死因の推定 不都合な二首は万葉編者の失態である

茂吉による人麿像の学界および歌壇制覇 折口信夫の人麿・吟遊詩人集団

説 折口・高崎・谷本説と茂吉の猛烈なる反撃 郷土史家への先制攻撃と

石河邑の発見 亀村の津目山に推定するための茂吉の苦闘 代用証明を積

み重ねる茂吉的執念 「鴨山考」の勝利と新しい鴨山の発見 あっけない

変説と茂吉の鴨山歌

第二章 鴨山考批判

七

鴨山五首は一組で人麿の最後を語っている イワネシマケルの誤説に立つ鴨

山イメージ 仙覚・契沖・真淵ら古注のとり第二首の解 カヒニマジリテ

の誤解による石川イメージ 大いなるものは悲嘆であって景色ではない

当代随一の詩人がなぜ辺境で淋しく死んだか 契沖の下級官吏説と真淵の朝
集使説 下級役人赴任説のもつ数々の矛盾 石見出生説・遊芸集団説・流
罪説 茂吉の浜原・人麿終焉地説と矢富氏の実証的反論 詩人の空想が生
んだ浜原の砂鉄採掘事業 近代主義的万葉理解の限界——真淵の古今序改
竄 人麿と平城天皇を結ぶ伝承——水・悲劇・猿の心象 正史に残る柿本
佐留の痕跡と真淵の論断 仙覚と由阿の古注に見る人麿の死の解釈 伝承
のつたえる人麿と子・躬都良の運命 正徹のつたえる高津在の人麿木像の怪
異 忌日の伝承——核をなす流罪・水死・怨霊の心象 卷一・二は古代統
一国家形成を歌う叙事詩である 運命の年・大宝元年と和銅元年——人麿と
不比等

第三章 柿本人麿の死の真相……………

鴨山五首が語る悲劇の三つの局面 墓のある小島で詩人は自らの挽歌をうた
う 人麿はいかに葬られたか——山峡説と火葬説 合理的解釈ゆえのさま
ざまな誤読——土葬説ほか 古注に見る浮舟の死のはるかなこだま 夫の
水死体を探しあぐねた妻は悲嘆にくれる 名を秘めた友人の権力者に対する
痛切な告発 『竹取物語』に忍びこませた不比等への諷刺 都の人々は人

身御供の噂に恐れおののく 流罪の地としての鴨島と木梨輕皇子の場合

出雲神話の伝える不幸な父子の処刑 春の海の無惨な水死刑——人麿の最

期 『万葉集』編者はひそかに圧殺された真実を語る 流人の島・狹岑島

の痛ましい遺跡群 凄惨きわまりない美——流人・人麿の絶唱

第二部 柿本人麿の生——賀茂真淵説をめぐる——

第一章 賀茂真淵の人麿考

人麿論の方法について 賀茂真淵の人麿解釈 柿本氏の消長と『万葉集』

復権期の暗合 人麿時代考に重なる『古今集』仮名序解釈 俊成と定家の

先説にたいする懷疑の表明 二条家における権威ある誤謬の形成 定家の

仮名序否定と『万葉集』成立期の推論 契沖の家持私撰説と真淵の二段階編

集説 真淵の人麿年齢考の二つの前提 八色の姓制定と柿本朝臣登場の意

味 伝承の正三位と考証の下級地方官との間 『人丸秘密抄』の奇妙な記

述と真淵の考証の圧勝 『古今集』仮名序を改竄する真淵の近代合理主義

原典を書きかえた文献学者・真淵の弁明 古今序の謎と近代考証学の限界

紀氏の屈折した主張と柿本獏の秘密

第二章 年齢考

はたして正史は人麿にふれていないか 八色の姓の政治効果 持統体制確

立のための人材登用 名門・大伴氏の疎外と新興・柿本氏の登場 人麿と

猿——ありうる三つの関係 人麿の死と佐留の死は重ねることができ

真淵の人麿 舎人説は十分な論証といえない 真淵の呪縛力と土屋文明の懐

疑 草壁挽歌にこだまする天孫降臨神話

「水底の歌」(上巻・下巻) 総目次

〈上巻〉 第一部 柿本人麿の死——斎藤茂吉説をめぐって——

第一章 斎藤茂吉の鴨山考

第二章 鴨山考批判

第三章 柿本人麿の死の真相

第二部 柿本人麿の生——賀茂真淵説をめぐって——

第一章 賀茂真淵の人麿考

第二章 年齢考

〈下巻〉 第二章 年齢考(承前)

第三章 官位考・正史考

第四章 『古今集』序文考

装
幀
·
山
内
璋

水底の歌（上巻）

—— 柿本人麿論 ——

第一部 柿本人麿の死

——斎藤茂吉説をめぐって——

第一章 斎藤茂吉の鴨山考

歌聖・柿本人麿の秘密

日本の詩人といえば、誰しも、二人の名前を逸^いすることが出来ないであろう。柿本人麿^{かきのものひとまろ}と松尾芭蕉^{しょう}である。たとえば現在において、もっとも深く日本の詩歌を理解している一人であると思われる山本健吉氏は、次のようにいつてゐる。

「私が少年時代に文学書を読み出して以来、一貫して私の念頭を去らない二人の日本の詩人がある。柿本人麻呂と松尾芭蕉とである。

もちろんその外にも、『古事記』の神話的世界や、『源氏物語』の物語的世界や、世阿弥や近松の劇的世界があり、近代の文学者としても鷗外や漱石があるけれども、この二人の古典的詩人のやうに、久しく持続して私の脳裏を支配してゐたわけではない。時としてはアポロ的な赤人を、ディオニソス的な人麻呂と並べて考へたり、あるいは隠者的な芭蕉よりも絢爛として浪漫的才華を誇つた蕪村を上位に置いたりしたこともあつたが、けつきよく一時のことに過ぎなかつた。いつも私の思ひは、人麻呂と芭蕉との上に帰つてくるのである」（山本健吉『柿本人麻呂』）

思ひはいつも、人麿と芭蕉に帰つてくると山本健吉氏はいふ。私もそうである。数学少年であつた中学三年の私は、芭蕉を読むことにより文学の毒を知り、そしてまもなく人麿の歌の不思議な魅

力にとらわれた。そして、戦争に行く私の背囊はいのうにこっそりしのばせた本は、西田幾多郎の『善の研究』と『万葉集』であった。けれど、戦争から帰った私は戦争に関するすべてを忌み嫌った。私は西田哲学の痛烈な批判者となり、同時にますらおぶりと称せられる『万葉集』の否定者となった。『万葉集』より『古今集』を、ますらおぶりよりたおやめぶりを。そういう思いで書いたのが私の論文集『美と宗教の発見』の中に収められている「美学におけるナシヨナリズム」であった。そこで私は『古今集』の歌の繊細な美しさを論じ、そしてその繊細なる感受性に裏づけられている美意識が、いかにその後の日本文化を支配しているかを論じた。『古今集』万歳、私はそう叫んだけれど、私の意識の中に何かが残った。『万葉集』の歌はどうなるのか。私は、『万葉集』の歌の恐ろしい魅力を感じていた。しかし、それを、ますらおぶり、壮烈というおもりをつけて意識の底に沈ませ、正岡子規しきによってなされた価値転倒の試みを、もとにもどす作業の面白さに心を奪われていた。しかし今、私の心の底深く沈ませた『万葉集』が、意識の上に浮かんでくる。私の古代研究の進展と共に、今、『万葉集』は全く別な相貌そうぼうを伴って私の心に浮かび上がる。

人麿と芭蕉、日本の詩歌について真剣に考える人は、誰でもこの二人の詩人に帰ってくる。そして、この二人の詩人を歌聖、俳聖とたたえた日本人の感覚は正しい。しかし、人麿、芭蕉と二人の詩人をならべるとき、両者は、彼等についての認識の程度の点ではなはだ異なっていることが分かる。芭蕉については、ほぼ、その人生の全貌が知られている。もちろん、若き日の芭蕉、あるいは妻子との関係などまだ分からぬこともあるが、彼の後半生、つまり芭蕉を芭蕉たらしめる旅の生活については、『奥の細道』をはじめとする彼の多くの旅行記などによってよく知られている。

彼はいわゆる旅の詩人である。美を求めて一生を旅に送る漂泊の詩人。芭蕉を一人の俳聖にするものは、その俳句がすぐれている点によるばかりではなく、彼の孤独、漂泊の旅の生活によるので